

日蓮聖人真蹟遺文解読の問題点について

松 岡 正 次

今日我等は高度に整備された日蓮聖人の遺文集を手にして
いる。しかし現今の遺文集でもなお、諸学者の慧眼を潜り抜
けた左記のような真蹟解読上の問題点が少なからず存在す
る。

一、当初の学究の真蹟解読の錯誤が後々まで受け継がれて
きたもの。二、真蹟に書き加えられた他筆の誤りを正字と誤
認してきたもの。三、真蹟の文字や語句を読み落としている
もの。四、真蹟の解読が杜撰で、異字・誤字・脱落等が見ら
れるもの。

ここではそれらの問題点を明らかにするために、日蓮聖人
の遺文集としては『昭和定本日蓮聖人遺文』⁽¹⁾（以下『定遺』と
略称）を、また真蹟遺文としては『日蓮聖人真蹟集成』⁽²⁾（以下
『集成』と略称）を用いて考察する。

一 八九『転重軽受法門』

末法に入ては此日本國には當時は日蓮一人みへ候か（『定遺』

五〇八頁）

末法に入ては此日本國には當時は（時はと他筆傍書）日蓮一人み
へ候か（『集成』第二卷一〇二―一〇三頁）

これは、宗祖が末法における法華流布の大難を語る文であ
る。文中「末法に入ては」に加え「當時は」と、時を示す語
が二つもあるのは奇妙である。真蹟の「當時は」に対し「時
は」という他筆傍書があり、『定遺』はその他筆を採って本
文を「當時は」とする。しかしこれは宗祖の筆の「當時は」
が正しい。その「當時」を辞書⁽³⁾で確認すると「直接すること
にあたる」「そのことにぶつかる」とあるから、右の文は「末
法に入つた日本国において『法華經』流布の大難に直接ぶつ
かったのは日蓮一人のみである」という聖意が浮かび上が
る。この『定遺』の「當時」は「當時」とすべきであろう。

二 一二一『富木尼御前御書』

かまへてさもと三年、はじめのごとくに、きうち（灸治）せさせ

給へ(『定遺』一一四八頁)
 かまへてさんと三年はしめのごとくにきうちせさせ給へ(『集成』
 第二卷二五五頁)

右の文は、真蹟の「さんと三年」を、『定遺』が「さもと
 三年」と読んだために、意味不明の文章となつてしまつてい
 る。この「さんと三年」はその「ん」を促音便で読み「さつ
 と三年」とすべきであろう。すると前掲の文は「かまへてさ
 つと三年はじめのごとくに、きうち(灸治)せさせ給へ」と
 なる。その「さつと」は時間の早いさまをいい、宗祖が病氣
 の富木尼に、「さつと素早く三年前のように回復されるよう
 に」と励まされた文章だということになる。なお「さつと三
 年」に続く読点は不要であろう。

また同遺文には、もう一つ次のような問題点がある。

當時つくしへむかへば、とどまる女^めこ、ゆくをとこ(『定遺』
 一一四八頁)

當時つくしへむかへはとどまるめこゆくをとこ(『集成』第二卷
 二五七頁)

まず右の『定遺』の文の「とどまる」は、真蹟では「とど
 まる」であることを指摘しておく。さてこの筑紫へ出陣する
 関東武士と家族との別離について、『定遺』は鎌倉に留まる
 側を「女こ」としているが、筆者は仮名で「めこ」と読むべ
 きだと言う。その理由の第一は、中古以来妻子のことを「め

日蓮聖人真蹟遺文解説の問題点について(松岡)

こ」というからである。第二に『定遺』が記す「女^めこ」とい
 う用語を筆者は知らない。第三には、当消息の冒頭に「をと
 このしわさはめのちからなり」とあるが、夫婦に関して宗祖
 も、夫を「をとこ」といい、対する妻を「め」と書かれるか
 らである。従つて前掲の『定遺』の「とどまる女^めこ」は「とど
 まるめこ(妻子)」と改めるべきであろう。また今触れた当
 消息冒頭の『定遺』の文は左記のように記述されるべきだと思
 う。

をとこ(夫)のしわさはめ(妻)のちからなり(一一四七頁)
 をとこ(夫)をみればめ(妻)をみる(一一四七頁)

三 一二四二『四信五品鈔』

近來ノ学者一同御存知^三云ク 在世滅後雖異^リト修行スルニハ法華^ヲ必具ス
 三学^ヲ 決^テモ一^ヲ不成セ(『定遺』一二九四頁)
 今來(他筆にて近來と訂正)学者一同御存知云 在世滅後雖異 修
 行法花必具三学 決一不成(『集成』第一卷二一〇頁)

これは第三者が真蹟の「今來」を「近來」と訂正傍書して
 いて、『定遺』はそれを受けて「近來ノ学者」とする。辞書⁽⁴⁾
 によれば、「近來」は「ちかごろ・このごろ」という現在に
 近い概念を示す語であり、一方「今來」は昔から今に至るま
 でという時間幅のより広い語だという違いがある。宗祖は、
 法華にあつても三学を欠くことは許されないと主張する「学

者一同」の誤謬を先に指摘し、次に当抄の後段に、末法においては『法華経』の大曼荼羅を信じて南無妙法蓮華経と唱え奉るところに戒・定・慧の三学が具わると説く。この一大法理を知らない僧尼は「一同」と書かれるほど今までに大勢いたのであるから、従って時間幅の広い「今来」という表記は当を得ているといえよう。この『定遺』の文は「今来」と記述されるべきであろう。

四 一一八『如来滅後五百歳始観心本尊抄』

天台傳教已後、知ル之ヲ者多々也。用フルガ二聖ノ智ヲ故也。（『定遺』七一〇頁）

天台傳（教歟他筆傍書）已後知之者多々也 用二聖智故也（『集成』第四卷一五頁）

右の真蹟の「傳」に、他筆で「教歟」と傍書してある。その傍書を受け入れて「天台傳教已後」と『定遺』は記述する。文中の「知ル之ヲ者多々也」の「之」というのは『法華経』の極説一念三千法門を指すのであるが、問題は前掲の文が天台と伝教二人のことを言う文章か否かである。筆者は聖筆の通り、これは釈尊以後最初に一念三千の法門を明らかにした天台大師のことをいう文章であろうと考える。その理由の第一は、「天台傳已後」の「傳」は「傳⁵」と読むが、「傳⁵」には「経書を解釈する、注釈する」という意味があるが、「天

台傳⁵已後 知ル之ヲ者多々也」と読んでも意味が通じるからだ。理由の第二は、その後続の文章を読むと、「所謂三論嘉祥・南三北七百余入・華嚴宗法蔵清涼等・法相宗玄奘三蔵慈恩大師等・真言宗善無畏三蔵金剛智三蔵（以下略）」（『定遺』七一〇頁）と記して、一念三千の法門を学んだ人物を多数挙げてある。しかしそれらは皆天台から学んだ人物ばかりで、伝教から教えを受けた者は誰もいない。従って前掲の文章は「天台傳⁵已後」と読むのが正しいであろう。すると文中の「用フルガ二聖ノ智ヲ故也」の「二聖」とは、従来天台・傳教とされてきたが、これは釈尊・天台だということになる。元々一念三千の法門は釈尊が『法華経』に説き示したものであるから、その釈尊に天台を加えて「二聖ノ智」と解釈しても矛盾は生じない。

五 三二一『随意御書』

なにとなければども心もふるまひ（振舞）も言もなを（直）しくなるなり（『定遺』一六一頁）

なにとなければとん心もふれ（れにるを他筆上書）まひも言もなをしくなるなり（『集成』第九卷一六六頁）

真蹟は「ふれまひ」と書かれているが、しかしその「れ」に他筆で「る」と上書きしてある。これは聖筆を重視する『定遺』の編集方針からすれば、他筆を廃して「ふれまひ」

と記述すべきであろう。次にもう一文取り上げる。

又きかせ給^フ弟子檀那も安穩なるべからずとをもひし上（『定遺』一六一六頁）

又此きかせ給^フ弟子檀那も安穩なるへからずとをもひし上（『集成』第九卷一八四頁）

真蹟には、「又」の字の次に「此」の字があると筆者は見る。宗祖の消印は無いから読み取るべきである。筆者は「又此^ヲきかせ給^フ弟子檀那も」と読む。これで文章も整う。

六 三九五『諫曉八幡抄』

其時日本國の百八十^{も、やそ}の神の栖^ミ給^ヒし寶殿皆焼^ケ失^セぬ（『定遺』一八三九頁）

其時日本國の百八十神の栖給し寶殿皆勢（焼と他筆傍書）失ぬ（『集成』第九卷一〇四頁）

右の『定遺』の文は真蹟と相違するところが二箇所ある。

その第一は『定遺』が「百八十の神」としているが、これは聖筆の通り「百八十^{いさほひ}神」とすべきであろう。第二に、真蹟に「皆勢失^{いさほひ}ぬ」と記述される文を『定遺』は他筆に随って「皆焼^ケ失^セぬ」としているが、そもそも我国歴史上日本中の神社が皆焼けたという事実はない。宗祖は我国の仏教伝来当時、仏教に反対し仏敵となった者の仏罰の現証を一々書き付けられている。その時排仏派を守護した神々も仏罰を蒙り、

全ての神々の神殿が「勢失^セぬ」と記され、一斉に勢力を失ってしまったと書かれる。従って『定遺』は、「勢^ヒ失^セぬ」と記述するべきであろう。なお当抄には、その外に幾つかの細かな表記上の問題が指摘できる。それらは「なさざ（ヰ）らめ」（一八三八頁）、「とは（わ）をもへども」（一八四一頁）、「あがむ（め）るところ」（一八四二頁）、「今^ノ迦葉（等）是也」（二八四三頁）、「出でて（ゝ）は」（二八四九頁）等（括弧内は真蹟の表記を示す）である。

おわりに

右の各論点は過去何百年もの間、真蹟解説上の誤謬が正されずに今日に至ったものが多い。今後さらに完成された遺文集を目指して、検討する余地があるのではなからうか。

- 1 立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』二〇〇〇年。
 - 2 『日蓮聖人真蹟集成』全十巻、法蔵館、一九七六年。
 - 3 『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇一年。
 - 4 『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇一年。
 - 5 『大漢和辞典』卷一、大修館書店、一九六八年。
- 『大漢語林』大修館書店、一九九二年。
- 『大漢語林』大修館書店、一九九二年。
- 『大漢語林』大修館書店、一九九二年。
- （キーワード） 日蓮聖人の真蹟遺文、日蓮遺文、真蹟遺文解説（佛教大学大学院修了）